

乳児期の感覚間協応に関する理論上の問題

山 口 恒 正

Les problèmes théoriques sur les coordinations sensorielles chez l'enfant

YAMAGUCHI Tsunemasa

I. 問題設定の仕方の分類

およそ、如何なる事柄を問題とし、何故、その事柄を問題としなければならないか、又どう
いう枠組みにおいて問題とするか、という「問題設定の仕方」は、理論の出発点であり、形づく
られた理論による事実の解釈の仕方や、理論の「適用範囲」を決定すると考えられる。知覚に
おける感覚モダリティー間の関係の発達に関する諸理論の可能性を検討するにあたって、最初
に「問題設定の仕方」という観点から整理を試みるのも、上記の理由による。

I-1 分類のための基準と用語

Kant はその『純粹理性批判』(文献①)の緒論(第二版)において、「経験」という言葉を二義
的に用いている。「我々の認識がすべて経験とともに始まるということについては、いささかの
疑いも存しない。何故なら[さもなくば]我々の認識能力はどのようにして……感覚的印象とい
う生まの素材に手を加えて、経験と呼ばれる様な対象の認識にするのだろうか。」第一文での「経
験」は、「感覚的印象という生まの素材」、覚知(apprehension)における多様なもの、ロック流
の観念、等といった意味である。第二文における「経験」は「対象の認識」を意味し、現象的実
在と一致するもの、ということになる。(前者には empirisch、後者には, Erfahrung という語
が当てられ区別されることもある(文献2))。この二通りの意味を L. W. Bech (文献3)に従っ
て、それぞれ「ロック的经验」「カント的经验」と呼ぶことにする。

又、Kant は、イギリス経験論を「質料的観念論」と呼び、それに対し、自らの認識論の立場
を「形相的観念論」と名付けているが、これは、Kant が認識に形相を認め、これを主観の側に
設定し、「対象が我々の認識に従わねばならぬ」と考えた事(コペルニクスの転回)に基づいてい
る(文献1)。筆者は、この Kant の区分に従って、認知発達研究において、経験の意味を「ロッ
ク的经验」に限定し、認知発達をこの立場から解き明かそうとする考え方を「質料的立場」と名
付けよう。一方、対象を形相的に構成する主観の先験的働らきを認める考え方を「形相的立場」
と名付ける。Kant においては、「感覚的印象という生まの素材」が形相によって加工されるの
であって、対象の側にも主観の側にも何の変化も起こりえない。一方、Hegel では、意識とその
意識に現われるままの対象の性格が、相即に関係していることによって、意識が変われば対象も
変わり、対象が変わるところに新たな経験がえられると考えられた。このように、Hegel におい
て経験は1つの道程である。このように、意識と対象がお互いに変化してゆくとき、これを「ヘ
ーゲル的经验」と呼ぼう。このように、主観の側の性格と客観の側の性格が、相互規定的である

ことの真の姿をつきとめることを研究上の課題と考える立場を「相互規定的立場」と呼ぼう。さて、この相互規定性は、通常、主体自身には知られないのだが、この相互規定性の仕組みを主体自身が知ることがある場合、「相互規定性を知る」と呼ぶことにする (Hegel の経験概念については、『精神現象学』緒論を参照、文献4)。

この「ロック的经验」「カント的经验」「ヘーゲルの经验」は、3つの立場からみた、経験が成り立つ姿を示すものである。

I-2 認識論の歴史的吟味——何が問題となってきたか、および、何を問題とすべきか。

ここでは、本稿の中心話題、感覚間協応 (intersensory coordination) の問題に関する認識論上の論争点を調べることにする。感覚間協応とは、異なる感覚モダリティが、協応することによって、異種の感覚器官において、対象の何か共通した性質を受けることになることを示す。それは、本来、異種の感覚においては、対象の異なる性質を受けとるものだとする考えが根底にあり、発達的に共通した性質を受けとるようになることの説明として考えられた概念である。この問題はイギリス経験論において、正面から取り上げられた。

ここでは、認識における感覚(知覚)の位置づけと感覚の性質をどう捉えるかの問題、経験のしくみの問題を考えてゆくが、その議論の中で、感覚間協応の問題そのもののしくみを明らかにしてゆきたい。

<経験論の吟味—質料的立場の源>

イギリス経験論者の Locke と Berkeley を中心にとり上げる。

経験論者は、よく、生得論者と対比されるが、Locke などは感覚器官の機能などは生まれつき充分働きうると考えている点では、生得論者であり(このような点は、Bower, T.G.R. にもうかがわれる傾向である)、複雑観念に関しては、はっきりと、獲得論者といえる。それでは、生まれつき持ち合わせない観念を持つようになるのは何によってか。経験によって。経験とは何か。ここに経験論特有の二つの前提が置かれる。認識の源を物質的对象と感覚にのみ限定すること、及び、認識は、そのような感覚に与えられたもののみを材料とする経験から始まる、と考えたことの二つである。これは、認識の源と経験のしくみについての2つの問いに対する、経験論共通の答である。この考え方によれば、認識は一人一人の持ち前の、生まれつきの感覚器官の性質に限界づけられていて、感覚には与えられない対象の性質は認識することが出来ないことになる。

Locke (文献5)は、観念や原理の生得説に対しては、民族によっては神の観念をもたない民族もいる、といった普遍性の見地から、生まれつきの観念はないと考えたわけだが、それでは、どのようにして観念は心に生じるのだろうか。「すなわち、感覚の対象としての外なる物質的な事物と、内省の対象としての内なる私たち自身の心の作用、これだけが私たちのいっさいの観念のはじまる起源のように私には思われる」(文献5、第2巻)。又、観念は悟性の対象となるものであるが、観念は感覚によって直接得られる単純観念と複雑観念に類分けされる。そして、悟性の能力としては、「抽象と形式的普遍性と形式的同一性しか認めない」(Hegel『エンティクロペディ』)。そこで、一つの感覚モダリティの対象である物質的事物の性質の確定(目にとっての色、耳にとっての音、触覚にとっての固性)、2つの感覚モダリティに共通な対象となる物質的事物の性質の確定(視覚と触覚に対する、延長、形状、運動、静止、そして空間)を行う。そして、

第一性質と第二性質の区別。Lockeにおいては、物体の实在と感覚による単純観念の一致を自明なことと考えた。

Berkeley の批判は、①実体としての物質的实在性の否定、②異種感覚モダリティーに共通に受けとられる性質の否定—とくに視覚から、触覚的性質(奥行き、三次元性、距離)の知覚可能性を消し去り、視覚に与えられるのは、光と色のみとしたこと(文献6)③第一性質と第二性質の区別の否定、④抽象一般観念の否定として、まとめることができよう。

上記のような、感覚間の共通性質に関する Locke と Berkeley との考え方のちがいを端的に示すのは、いわゆるモリヌクス問題 (Molyneux's problem) においてである。モリヌクス問題とは、「生まれつきの盲人が、大人になって、彼の触覚によって、象牙製のほとんど同じ大きさの立方体と球を触ったとき、どちらが立方体でどちらが球かを告げて区別することを教わっているとす。そして今、立方体と球がテーブルの上に置かれていて、この盲人の目が見えるようになったとする。問い『彼がそれらに触れる前に、彼は今、視覚によって、どちらが球でどちらが立方体であると識別し告げることが出来るかどうか』という問題である。

このモリヌクス問題には、次の側面がある。

0. 感覚器官が物を見るために充分に使えねばならない。
1. 2次元の形の弁別ができねばならない(円と四角)。
2. 3次元の形の弁別ができなくてはならない(球と立方体)。
3. 触覚によって知り得た、3次元の形の触覚表象に対応する、視覚対象のマッチング課題である。概念化はいらない。
4. 視覚経験はなく、開眼手術によって、初めて、その機会が与えられたとする。
- (5. 触覚から視覚へのモダリティ変換の問題であって、その逆ではない。)

Locke の答えは、「不可」であるが、その理由は、共通観念(立体性など)は認めた上で、視覚の二次元性認知は開眼後にもあるが(1は可能)、この二次元的な認知に判断を加えて、二次元の手がかりから三次元の実物を知るような習慣による因果的な結合の経験を持っていない(2が不可)からであるとする。そこでは、視覚器官は正常者と同様に働け、何かが見えること(この点は Berkeley も同じ)、その上、二次元的に見えることは、認められている。一方、Berkeley では、形の弁別(1)そのものが不可能であり、何か不分明なものを見るにすぎない故に、「不可」と考えられている。

又、Diderot (文献7)では、0が不可能、故に1が不可能、故に「不可」と考える。すなわち、眼球に写るだけでは、物はそれとして見えず、見るためには、事物の印象に注意をむけねばならず、幼児や生まれつきの盲人(開眼手術直後)には、それが出来ないので、2つの形を弁別しうるほどには見えないと考えた。

さて、以上のような、経験論という「質料的立場」の吟味から、「質料的立場」からは説明しえない、様々な困難が浮かび上がってくる。その1つとして、様々な感覚器官からの印象が「同一対象」に源を発するかどうかは、この立場からは決定しえない、という問題がある。(赤い、香しい臭いのする、やや硬い、酢っぱい、何かを、見、嗅ぎ、触れ、味わう事ができたとしても、それらの多様な印象が、1つの“リンゴ”から発したものか、別々の源からの印象をあたかも1つのものに発したかのように錯覚しているのか、を区別しえない。そのような区別を我々が実際、

行えているとしても、その根拠をこの立場からは説明しえない)。いや、むしろ、Berkeley は「同一対象」という考えそのものを批判する。「同一のものに触れかつそれを聴くのでないと同様、同一のものに触れかつそれを見るのではない。」(文献8)「同じものが視覚と触覚を触発する affecte と思うのは誤りである。」(ibid 136)

だが、一方で、Berkeley は、「これらのいくつか(諸感覚における印象)は、相伴う(accompany)と観察されるので、一つの名前で標印(marked)されるようになり、かくて一つの事物といわれるようになる。」(文献8)

しかし、別々のモノからの印象が相伴っている場合と、1つのモノからの印象が相伴う場合とを、そこでは区別しえない。Berkeley は2つの著作の中で矛盾をおかしているというより、先著(『文献8』)において、はっきりしていたことが、『原理論』においては、accompanyによって、問題が別の問題となり、なぜ一つの名前として標印しえるかが明らかでない。ここで、考えねばならないのは、我々が見たり、聞いたりする際には、あるモノの色、あるモノの臭い、あるモノからの感触を知覚するが、「質料的な立場」では、印象は、モノから切り離されて、我々に与えられると考えられていることである。我々に知覚されるモノの印象から、感官に依存する部分をとり除くと何も残らないのである(文献8, 15節)。印象をいくら束ねてもモノは生じない。このようなモノが考えられていない以上、視覚対象としてのモノと触覚対象としてのモノの一致云々を問題にしえないのは自明のことであろう。

さて、ここで感覚にたいする考え方において必要な区別を行いたい。1つは、感覚とその対象との関係を外から考える、「外からの観察の方法」と、知覚経験を分析して、感覚には、何が与えられているかを考える、感覚内容を「内から分析する方法」である。Berkeley は、『文献6』において、第2の立場から、視覚を分析した。そして、「質料的立場」においては、主体は、感覚の外に立って、感覚と対象との関係を知ることはないことが、前提されていたことを思い出そう。「外からの観察の方法」は、たとえば、盲人自身がインクの字は読めないが、点字は読むことができるということを、モダリティと対象の関係として知るには「外からの観察の方法」を用いねばならない。一方、盲人が、自分はどのように様々の点字を区別しているかを知るには、「内から分析する方法」を用いねばならない。この二つの「方法」は、単なる理論上の立場というより、通常の生活の中にも見られることであるが、Berkeley においては、「外からの観察の方法」において、自明と思われた事柄を(視覚を通じて我々は何かからのある色や形を見ている)「内からの分析の方法」によってくつ返した、という一面をもつ。

<形相的立場の吟味>

さて、Berkeley においては、空間は、少なくとも二種類(視覚的空間と触覚的空間)あり、それらが一致することはないと考えられた。又、同一対象を我々が見、触れていると考えるのは(習慣によるのであって)本来的には誤りであると考えられた。Kant においては、空間は一つ(或いは一つとなるべき)であり、現象の統一性は、感性和悟性との共同による判断作用によってなされる(文献1 以下同)。

このような事は如何にして可能か。主観の側の形相の働きによってであり、Kant においては、客観の側には形相を認めない。又、「諸々の対象に関わるというよりは、むしろ諸々の対象についての我々の認識の仕方—それがア・プリオリに可能となる限り—に一般に関わるころのすべ

ての認識) (A15 B29) を認識することが Kant の課題であった。

客観の側に形相を認めないこと、対象に関わることなしに、認識について認識することは、全く奇妙であるが (Hegel の Kant 批判はこの点に関わる)、ひとまず、本論に関わる空間と、諸印象の統一に関する Kant の考え方を見ることにする(但し、心理学上の問題に関わると思われる範囲内で)。「直観は、全て感性的なものとして、触発 (affectionen) によって生じ、従って概念は、機能すること (functionen) によって生ずる……。単に直観以外にはいかなる表象も直接に対象に関係することができないから、概念は決して直接には対象に関係せしめられず、対象についての何らかの他の表象に関係せしめられるのである。判断とは従って、対象についての間接的認識、すなわち対象の表象の表象である。」(A68 B93)。すなわち、概念ないし悟性は、直接には、対象と関係しえない。悟性は標識を媒介として、感性へと関係するが、感性そのもののあり方には影響しない (A19 B33)。「感覚がそこにおいてのみ秩序づけられ、一定の形式に整理されるものは、それ自身これまた感覚であるということはあるから……。現象の形式は、感覚にとっては全て心の中に先天的にあらかじめ存するものでなければならず、それゆえ一切の感覚とは区別されて考察されるものでなければならない。」(A20 B34)。

こうして、直観に与えられる表象から感覚(内容)が取り除かれると、Berkeley では何も残らなかったが、Kant では、感性的直観一般の純粹形式としての空間が残される。すなわち、空間は物自体の性質ではなく認識主観のア・プリオリな形式として存在し、客観の空間性は、この主観の形相化の働きによると考えられている。感覚器官を通じて外から感性に与えられる多様の中には空間はなく、多様な姿の中にある空間一般の性質は外部感覚を通して、対象に内から与えられた主観の形式である。ここでは、外から与えられる感覚内容の中になければ、それは、内にあると考える、この二分法的考え方に注意しておこう。主観と客観は相互規定的に決定されると考えるからである。又、Kant においては、唯一の空間のみがあり、「空間における多様、従って諸空間一般という一般概念は、もっぱら諸制度の上に基づいて立てられるものである。」この空間の唯一性は、感覚とは、又、感性とは、何ら関わりなく、ただ一切の空間概念の根底に存するとされる。ここでは、空間は、対象を表象する空間として(客観としての空間)と、空間概念の根底に存するものとして(主観としての空間)の二種が同一のものと前提されている(空間の経験的実在性と先験的観念性)。

次に、対象について。対象を先験的に認識するためには、1.純粹直観の多様 2.構想力による多様の総合 3.総合に統一を与える概念(悟性に基づく)の三つが必要とされるが (A79)、「一つの判断における様々なる表象に統一を与えるのと同じ機能が、一つの直観における様々なる表象の単なる総合にも統一を与えるものであり、この機能は一般的に言えば、純粹悟性概念と呼ばれる。」(B105)。そして、悟性のカテゴリー表として、量において、単一性と数多性、総体性が与えられる。「総体性は、数多性が単一性として考察されたもの」(B111)であり、第一の概念と第二の概念は悟性の特殊な活動によって結び合わされて、第三の概念(この場合は総体性)が生み出されるとされる(B111)。感性的直観の結合(総合)によって、「あらかじめ自分で結合したのでなければ、何ものをも、客観中に結合されたものとして表象することができず……結合とは、客観によっては与えられず、ただ主観によってなされる……」(B130)。そして、「結合とは多様なものが総合的に統一されるということを言い表わしている。……統一は、むしろ自分が多様という

表象に付け加わることによってはじめて結合ということを可能ならしめる」(B131)。

なお、悟性観念の根拠として、統覚の先験的統一があげられている(17以下)。

我々は、ここに、「同一対象の問題」に対する、一つの解決をみたわけである。

＜相互規定的立場の吟味＞

Hegel は、Kant の形相的観念論を受けつぐが、形相を客観の側にも認める(『エンチクロペディ 4』補遺三)。又、Kant は悟性規定の有限性の理由を、「それらがわれわれの主観的思惟にのみ属し、物自体は、それ(思惟)にとって、あくまで彼岸であるとした点」(ibid 60 補遺一)で誤っており、「悟性規定自身が有限であり、それ故、それらの有限性をそれら自身に即して指示せねばならない。」(ibid)ここに、主観(たとえば悟性)とその対象規定の限界性が、対象規定の内容に則して吟味され、その吟味によって、主観の限界性が暴かれるという例の弁証法的歩みが展開されることになる(『精神現象学』諸論 文献 4)

「対象の統一の問題」は、意識の中の知覚に関する部分で取り扱われる。Kant では、悟性の範疇の1つであった統一の問題が、さしあたり知覚の問題としてとりあげられる。ここでは、物の一者性をめぐり、それは物の現象であり、本質ではなく、ただ知覚の面からいうとそれを己の本質として引き受けざるを得ないことが証せられる。物の現われるままを真実として受けとらざるをえない(wahrnehmen)知覚(Wahrnehmung)において、対象は多数の性質(Eigenschaft)をもつが、これは、いわば、よせ集めであり(auch)、一者性(Eins)をもつには、他のものを、排除しえねばならない。それは、事物の für sich sein であり、統一のために一般諸性質としての、多様性を排除できねばならないが、一方、おのれの固有諸性質として、再び、この多様性を己のもとに帰属せしめえねばならない。これが、知覚の対象としての物のつくりである。一方、これに対応する、知覚の働らきにおいては、対象はまず、純粋な一として als rein Einer あらわれるが、やがて、「この物」において普遍的性質を知覚し、この普遍は「この物」の一なる個別態を越えており、最初の捉え方が正しくなかったことになる。等々……のいくつかの行程を経て、知覚は、己が越えて来たはずの、感覚に立ちもどり、そこからやり直すという、循環過程にひきずり込まれるという。ここに、反省の途があり、この遍歴の末に、「これら諸性質を帰属させることはただ意識にのみ帰属するのであり、したがって意識は諸性質を物においては、帰属させてはならないのである。この目的のために、意識はかざりにおいてはということを導入し……」といったことが自覚されるという。ここでは、知覚は、己への反省を通じて、感覚の外(上)に立っている、といわねばならない(文献 4)。

ともあれ、対象の統一は、知覚レベルにおいては、事物の側の性質ではないことは肝に銘じておこう。

II. Bower の理論の吟味——「質料的立場」の混乱

Bower, T.G.R. (1974a, b, 1979) は、自らの理論を分化理論と称している。すなわち、乳児期早期の知覚世界は、モダリティーの分化のない一体に融けあったものであり、この世界が成長にともなって、モダリティーの分化のある世界へと変化するのだ、と考えたのである。Bower によって乳児期早期の知覚世界を示すとされる実験は、空間と対象(モノ)に関するものである。その問題の立て方は認識論的な形をとる。すなわち、「どういう条件の方がより正確な

空間定位ができるか」と問うのではなく、「空間定位ができるのは何故か」という問い方をするのである。

さて、Bower の考え方は、言わば、裏返しになった Berkeley 主義である。Berkeley が「純粹視覚」の性質としては消し去った、視覚における触覚的成分(固性、奥行き、触性)を復活し、視覚における三次元の同一性知覚が生まれつきのものであると主張するなど、総じて「連合以前の連合の成立」を言い立てていると考えられる。たしかに、Berkeley とは違って、知覚における形相の問題を提起しさえしている。だが、その「質料的立場」による限界の故に、問題をはなはだ混乱して取り扱っている。Bower が初期の知覚の性格としてとりあげた primitive unity の実験的証拠は、1.聴覚—視覚—手による探索の協応。2.視覚—手による探索の協応 3.視覚—運動の協応、であり、すべて、我々が今まで吟味してきた、空間と「諸感覚の対象の同一性の知覚」に関わることが見てとれる。空間に関していえば、主体と対象との関係における空間であり、空間を「感性の外的直観形式」とした Kant の見解と重なり合う。「私の外」なる空間規定が、「互いの外」という規定に先立つとする Kant の見解を、Bower もそれと自覚せずに主張しているといえよう(1974a, chap 3)。しかし、「諸感覚の対象の同一性の知覚」に関していえば、「対象の同一性」が、学習にとっての必要条件であること(その意味で先験的)を指摘しながら、If there is no unity of the senses, the organism should not be aware of any discordance (1674b) とだけ考えて、この unity が我々の「悟性」の形式であって、感覚の性質でないことを充分、洞察しえていない。それ故、「日常の世界では、様々の感覚にたいして情報は、本質的に concordant に与えられる」(1974b)と考えてしまう。しかし、少し考えてみれば分るように、固いとみえた板を踏んでみると柔らかくて、水たまりにはまったりすることは多くはないが少くとも経験しうる所である。この事は、視覚に与えられる固性と触覚に与えられる固性のちがいであるが、Bower は視覚にある触覚的性質が生まれつきのものであるとして、感覚内容の点からは異なること(Berkeley の主張には正しくもこの点が含まれている)に気づかなかったものと思われる。感覚内容の点からは、先述したようにぴったりとした一致はないのである。正確にいうならば他の感覚モダリティにおいての有様を表象しうる内容と表象しえない内容があるにすぎない。視覚に熱の知覚が与えられているなら、乳児がアイロンでやけどをする心配はない。

すなわち、Bower のいう supramodal object perception の主張の中には「感覚様相を越えた知覚」という表現で正しく、形相の問題を提起しながら、感覚内容の一致についてまでそこに含めてしまい、それ故解釈に混乱を起している点がみられる。Bower のあげている、実験的証拠は筆者の観点からは、1.「外的直観の形式としての空間」の問題—空間が1つであるかどうかを問題としない。2.「印象の統一性」の問題—感覚モダリティ間のくいちがいをどう認知していくか、3.感覚内容のモダリティ間の変換可能性の問題、の3つの問題が含まれているように思う。1と2にそって述べる。

1.「空間」について。空間における物の方向定位(the localization of objects in space)は、感覚受容器における、時間的ずれ(time differences)にもとづく、たとえば、両鼻孔に到達する時間差にもとづく奥源の定位(成人で5°以内の精度)。これは不快な臭いに対して、生後1時間後の乳児が顔をそむける点で、定位能力は生まれつきのものだとされる(Bower 1974a)。

又、聴覚においても同様の時間差、位相差、強度差(すべて両耳があることに関係する)を手が

かりとする定位能力の存在が示されているが、この点は後に詳しく検討する。ただし乳児が両耳において知覚された2つの音が一つの音源から来ることを、どのようにして知っているかは分らないという (Bower, 1974a)。

次に、これは乳児では実験されていないが、指(右手の指と左手の指)に2つの震動 vibrators によって刺激を適度な時間差(1ミリ秒)をもって与えると、両指に震動は感じられず、その指の間の空間 the empty air の先に刺激された指に近い方に震動が感じられるという。

ここで注目しておきたいのは、当然の事ながら被験児(者)は、感覚器官における時間差を感覚器官における時間差として感じとっているというより、それを身体の外に感じとっている事、又それらの方向定位がすべて身体づくりに関係している事である。しかし、Bower は空間における物の定位として、近刺激を遠刺激へ変換するルールの生まれつき性(連合の生まれつき性)の問題として考えているが(嗅覚と聴覚)、それは位置の定位ではなく、方向の定位であり、モノの場所の同定に関しては何もいえないことに注意しておきたい。また、この方向性の感覚がどのような仕組の空間性に基いて生じているのかも決定しえない。それ故、空間は対象から独立にありうるという、Kant の主張は確かめる術もない。もし乳児における空間が常にモノに依存して生じるなら、モノを離れた空間の認識はどのようにして可能なのだろうか(これは Piaget 1937 の問題としたところである)。Bower は、身体と関わってはいても外部に感じとられる空間を、身体をもその中に含む空間や、モノから独立して表象しえる空間から区別していないと思われる(少なくとも、明らかに述べていない)。また、空間の一つ性を前提にしているが、この点の証明はない。

視覚における方向定位について、運動するモノ(乳児が動く場合も含めて)の運動方向が、生後1週間までに自分自身と関係づけて同定しうることを示されている。すなわち、Ball & Tronich (1971)は、真正面からのモノ(スクリーン上の映像)の接近には防御反応を示すが、乳児からずれてゆくミスパスの軌道に沿った接近には防御反応を示さないことが証拠としてあげられている。この場合でも、手がかりとしてあげられているのは、二次元的なきめの拡散であり、モノの場所の定位がなされているわけではない。運動しないモノの方向の定位についてはデータの欠如からはっきりとは述べられていない (Bower, 1974a)。

質料的立場では、モノの問題と空間の問題とを相互にすりかえることしか出来ないことは先述した通りであるが(モノの多様な印象は、空間的に結びつくことによって一つとなり、一方、場所は、モノがそこにあることによって示される)、先に示した原文につづけて、Bower は、If there is no common supramodal spatial framework, there is no possibility that the organism should even notice the discordance; the sound would be heard in its place and the sight would be seen in the place と述べて、その混乱を自ら示してさえる。音と見えが、同じ場所から感じられたとして、それが、1つのモノとどうしていえるのか。Bower は、その Multiple mother についての実験で、3人に見える母親の姿を鏡を用いて示すと、5ヶ月以前では混乱せず、三人の母に順に相手になってゆく。又、1人の母親と二人の未知の女性を同様の方法で示した所、母親にのみ相手になり、混乱はなかった。一方、5ヶ月以後では、3人の母の姿にたいして混乱を示したといわれる。5ヶ月以後になると、母親を場所や運動によってだけ同定するのでなく、「母親のもつ他の特徴もまたきめ手になってくるにちがいない」としている。場所や運動

によって、どのように「母親」を同定しえるのか、筆者には全く分らないが、この実験の解釈は Bower の混乱を示しているといえる。逆に、「そのモノのつくり」や「その人の有さま」は、場所や運動に「結びついている」限りは生じないことこそ示しているといえる。5ヶ月以前にあるのは、他の人との区別であるが、母親についての印象が「1人」の「母」の中に帰属していない。

同様に、運動の軌道上で物の形を、突然変化させる装置を用いた実験では、3, 4ヶ月児は混乱せず、5ヶ月以後混乱を示した。3, 4ヶ月児でも、母親を他の女性と区別はしているが、この実験での形の区別は、運動の同一性と区別されていない。5ヶ月以後、運動の同一性より形の方が、そのモノのつくりにとって重要な性質であることが、分ってくると考えられる。

ただ、Bower (1974a) は、対象の知覚や空間の知覚の章とは別に、認知の発達の章(7章)でこの2つの実験を扱っている。行動が「直接的な刺激入力に頼る」ことから、記憶からの情報に知覚情報を結びつけるような「ルールに頼る」ことへと発達する過程をつきとめる事が、7章の課題であるとしているが、扱われているのは、同じ知覚の問題である。

2. 「印象の統一性」について。印象の統一性の問題は、Bower では、discordance experiment として扱っている。拡声器を2つ用いて、母親からの声が、口以外から聞こえるように仕組んだ実験において、生後3週児はこのような条件では、混乱を示したという (Aronson and Rosenbloom (1971))。一方、McGurk and Lewis (1974) では、そのような結果は見られなかったとされる(音源と視覚源の場所の不一致)。又、Roelof 錯視を用いた実験(実際のモノの位置とは別の所にはっきりと変位して見える)では、年少児は物をつかみそこね、自分の手押ばし(reaches)を修正しえない。一方、年長児は視野に手が入るとすぐに手のばしのし方を修正している (Aronson and Rosenbloom (1972)) (実行器の自己受容感覚による位置と視覚による位置の不一致)。これは、年少児が誤まっても、その場所を知り得ない (cannot identify the locus of their error) からだとされる。又、見えるが、その場所ではつかむことのできない虚像に対して、新生児は手が何にもふれることができない虚像の位置につくや泣き出した (Bower et al. 1970a)。4ヶ月児は、つかめないと驚くが、それでも何度も手を出してつかもうとする。一方、5, 6ヶ月児は、つかめないと、驚いて自分の手をこすったりする (Bower et al. 1970b)。

これは、「触入力が、視入力から予期される場所になかったための現象」として、あるいは、「固性の視覚的特定と触覚的特定の間の不一致」、「質的な不一致」として二様に解釈されている。

以上の実験ではっきりしているのは、5ヶ月前の乳児は、人の有様やもののつくりの中での矛盾、不一致に気づくに到っていない可能性が大きく、一方、自らがつかむことによってその位置を確かめ得る場所に関する不一致に関しては、かなり早期から気づき得るということである。前者を対象のしくみについての知覚における不一致とすれば、後者は、感覚内容の不一致ということがいえよう。乳児が感覚内容の不一致に気づいたとき、5ヶ月以後になると、それを「外から観察すること」によって、その原因を知ってゆくようになると思われる。

Bower は物の場所を二通りに使っているが、その間の区別をしていない。1つは、主体との関係における場所であり、他は、他の物との関係におけるそのモノの位置である。このためには、「主体との関係における空間」と「互いの外としての空間」の区別が必要であり、モノの同一性の認知にとって、なぜ後者が重要であるかを Bower は説明せねばならない。

そして、筆者は、他のモノとの関係(空間的な関係も含めて)においてのモノは、感覚内容とし

て与えられた印象を再体制化せねば発生しえないと考える。感覚内容の中には、この意味でのつくりを備えたモノはないのである。それには、感覚印象をただ受けとることから一度離れる必要があり、対象をつくり直す必要があるのである。対象のつくりを与えるのは、感覚内容を内から分析する方法によっては得られない。感覚内容をこえた統一体を主体が設定せねばならない。

たとえば、乳児自身が私の母親や私の人形を設定しえた時、衣服がどんなに変化しても「母親」としておさめることが出来るかぎり乳児にとって母親であり、どんなに汚れても「私の人形」なのである。こうして、「母親」としておさめえないものとおさめえるものとの区別も可能となるのである。また、いつものお母さんとちがうお母さんといった1つの対象の中での区別も可能となるのである。おさめられるものをつくり、有様のもとには、主体がその対象において何を欲しているか、何を満たそうとするかという満たしの姿があると考えられる。

同一でありながら、様々な姿をした母親の全体像はこうしてできあがるのである。日常接する品々も、結局、同じ途を通じて、乳児に知られるようになるのである。

参 考 文 献 (I)

- 1) Kant, I. 『純粹理性批判』(高峯一愚訳)河出書房
- 2) Kant, I. 『プロレゴメナ』(篠田英雄訳)岩波文庫版
- 3) Bech, L. W. 『ケーニヒスベルクの哲人は夢を見なかったのか』(広川徹訳)理想 564 号
- 4) Hegel, G. W. F. 『精神現象学』(金子武蔵訳)岩波書店
- 5) Locke, J. 『人間知性論』(大槻春彦訳)中央公論社 世界の名著
- 6) Berkeley, G. (1709) An essay towards a new theory of vision.
- 7) Diderot, D. 『盲人書簡』全集 I (小場瀬卓三訳)法政大学出版会
- 8) Berkley, G. 『人知原理論』(大槻春彦訳)岩波文庫版

参 考 文 献 (II)

- 1) Bower, T. G. R. (1974a) *Development in Infancy*. Freeman. (岡本他訳 1979年ミネルバ書房)
- 2) Bower, T. G. R. (1974b) The evolution of sensory systems. In Macleod, R. B. and Pick, Jr, H. L. (eds.) *Perception*. Cornell University Press.
- 3) Bower, T. G. R. (1979) The origin of meaning in perceptual development. In Pick, A. (ed). *Perception and its development*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.